

明治大学教育会研究大会 分科会概要

第1分科会 学校現場で見る日本とドイツの教育の違い

和辻 龍 先生（東京都私立品川エトワール女子高等学校）

〔発表概要〕

私は明治大学大学院理工学研究科を修了し、2014年3月まで東京の私立学校に勤務した後、ドイツへ渡航して2017年3月までの3年間ニーダーザクセン州に滞在しておりました。ドイツでの3年間で、日本の学校制度で言う小学校5年生から高校3年生までの生徒が通う学校である、「ギムナジウム」で、生徒と教員両方の立場で学校生活を送りました。

生徒としては、中学1年生のクラスに同行し、生徒と共に全ての授業や行事に参加しました。化学ではガスバーナーの使い方に四苦八苦しながら燃焼実験に取り組み、体育ではバスケットやドッジボールなどで共に汗を流しました。また、数学の授業では生徒として参加しつつ、理解が遅れている子には補足説明をして助けてあげました。このような生徒としての学校生活を通して、実験、実技、座学、いずれの授業にも共通している、常に「自ら熟考」して、「存分に議論」する授業が展開されていく形態を研鑽し、ニーダーザクセン州が重視している、「思考力」と「自己表現力」を肌で感じる事が出来ました。

教員としては、日本人であることを大いに生かして、地震や津波などの自然災害の理論(地学)、日本の名所や名城とその歴史(歴史)、戦国時代(日本史)などを、映像とパワーポイントを使用して授業しました。また、日本の学校では当たり前に行われている避難訓練は、大きな地震がないドイツでは経験したことがない新しい「知識」として、実際に訓練体験させることによって日本への興味を引き出しました。

このような生徒と教員両方の立場で過ごした学校生活から得た視点と、日本の教諭経験を照らし合わせるによって、学校現場から見える日本とドイツの教育の違いを明らかにします。

第2分科会 模擬授業 高等学校公民科「現代社会」の討論授業

小野繁樹 先生(埼玉県立越谷東高等学校)

〔発表概要〕

昨年に引き続き、現職教員による高等学校公民科の模擬授業をおこないます。

科目は「現代社会」。単元は「少子高齢化」。

分科会に参加される皆さんを高校の生徒に見立て、一つのテーマについて討論し

て頂きます(アクティブ・ラーニングの手法ですすすめます)。

テーマは単元との関連で「赤ちゃんポストに賛成か反対か」。

高校現場での授業の一端を紹介しつつ、全員参加型の活発な分科会になればと思います。

第3分科会 **あの頃、あれをやっておけば良かった ～10年を振り返り、3年先を考える～**

小林隆介 先生（稲城市立稲城第二中学校）

〔発表概要〕

あつという間に 35 歳。教員生活 11 年目。学生時代はゼミの仲間と読書会を行い、教員になってからは英語教育や学級経営、部活動に全力で取り組んできたつもりです。しかし、学生時代、講師時代、初任の頃、副担任の頃、初めて担任をもった頃、行事を担当した頃、生徒や同僚との関係性で悩んだ頃、「あの頃、あれをやっておけば良かった」と思うことがたくさんあります。そして、今も悩みや心配事は尽きません。

本分科会では、私を含めた参加者の皆さんで、今までの学生生活・教員人生を振り返ります。その中で、子どものさらなる成長と、より良い教員人生を送るために必要なことを考えていきます。「こうすれば上手くいく!」というスキル・ノウハウから、「どのような生徒を育てたいか?」という教育理念まで、色々なことを共に考え、共に話す時間にしたいと考えています。この会が終わった後に、参加者同士で縦と横のつながりができ、何か1つでも皆さんが行動に移すきっかけとなれば幸いです。

第4分科会 **私立と公立 ー教師として目指していくことー**

末 佐和子 先生（東京都立小石川中等教育学校）

〔発表概要〕

私立中堅校で教師になり、7年間の担任業務を経て、今年度より都立学校で働いています。

担任業務の中で、苦労や思い通りにならないことがありました。一方で、自分の人生の1ページに残るようなやりがいや喜びもあり、そのような経験が私をこの仕事の虜にさせています。私学の強みと弱み、そして学校教育が抱える現状と課題に対して私学が取り組めること、取り組めないことに直面しながら、教師としてのキャリアプランを見つめ直した時、私が次のステージとして選んだのが公立学校での勤務でした。私学公立問わず、多忙な日々の中で私を支えるものは、恩師やベテランの先生方との語らいの中で、教師としての自分のアイデンティティ

ィをよく見つめたところにあると思います。

今後、世界屈指のスピードで変化するこの日本において、真剣に教師として生きていくのは容易なことではありません。本分科会において、私の体験談や実践例を紹介しながら、教師としての自分の軸をどこに置くのか、教師としての自分の生き方をどのようなものにしていきたいのか、参加者の方々とともに考える機会にしていきたいと考えています。

第5分科会 人権教育におけるカリキュラム・マネジメント ～ 全職員で取り組む校内体制づくりに向けて ～

塚本譲二 先生（宮崎県立都城西高等学校）

〔発表概要〕

地域内の伝統校と後続校による総合選抜が廃止されて以降、入学者の流れは伝統校に傾き、本校は大学合格者等において大幅な減少と低迷が続いている。その一方で、怠学や学校不適応、心因性の悩み、発達障がいのある生徒の進学者が増えている。これからの普通科高校は、教育上特別な配慮を必要とする生徒の進学先として、重要な役割を担う学校になると考える。本校はその使命感を強く受け止める職員集団から成る普通科高校を目指している。そこで、人権教育をとおして、すべての生徒が安心して学校生活を送るとともに、学力の定着や進路目標の達成を保障する教育の実現を目指している。最も重要なことは、配慮を必要とする生徒たちの学ぶ権利を保障することが学校の義務、学校の使命として確立されることだと考える。さらに、学ぶ権利は学ぶ意欲によって確立するという考え方で、ボランティア活動を中心にした体験活動の充実を新たな学校の特色として進めている。

ボランティア活動等の体験活動だけでは、本来の人権教育、とりわけ、同和教育の力強い推進という点では不十分である。そのために、カリキュラム・マネジメントの手法を取り入れ、従前のものを見直して、改善と改革を進め、実践していくことが必要である。例えば、各教科・領域との関わりを意識させ人権感覚の育成を視点に入れた指導を意識的に行わせる。以上の作業を全職員の協働で行うことを目指している。また、同和教育の指導を「地歴科」「公民科」のなかで充実させ、ホームルーム活動は、ワークショップ形式で行う人間関係づくりを基本し、その運営をとおして、ファシリテーターとしての技能を向上させ、これから重視される「主体的・対話的で深い学び」の指導につなげていくことが理想である。このように全職員、全教科・領域で行う人権教育の推進は、ホームルーム担任の負担軽減になると考え、間違いなく現実のものとなる、職場の年齢構成に不均衡が生じた場合の対応にもなると思われる。

**第6分科会 ルワンダとザンビアでの日本の途上国支援の考察
～JICA 教師海外研修に参加して～
コミュニケーション英語での国際理解教育実践**

陣野俊彦 先生（東京都立練馬高等学校）

〔発表概要〕

発表者は、JICA東京主催の「2017年度教師海外」でザンビアに派遣予定（8月6日～8月16日）※である。

今までの先進国から途上国への一方的な支援から、共同研究などを通じた双方向性のある支援の在り方を、ルワンダを紹介した教科書の英語教材、ザンビア研修の体験を通じて考える。

具体的には、フォトランゲージなどの参加型学習（アクティブラーニング）の手法を用いた授業体験などを考えている。

国連が謳う「持続可能な開発目標（SDGs）」、誰も置き去りにしない地球作りを都立高校普通科の生徒たちと共に考える授業実践の報告をする。

（※発表申込時の発表者からの概要）

第7分科会 若手教員と語る — 教育現場の現在と課題 —

伊藤貴昭 先生（明治大学文学部）

〔発表概要〕

若手教員が直面する教育現場の課題について、どのようにして乗り越え、教職経験智を深めて明日へ望んでいくか、参加者、将来教職を目指す学生そして教職課程教員とで意見交換をする。

具体的には、教科指導・生活指導・特別支援・部活動指導等々を、パネル討論形式で進めていく。

（明治大学教職課程常設分科会）